

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2017年2月23日放送

## 「第40回日本小児皮膚科学会 ①

大会を終えて」

広島大学大学院 皮膚科  
教授 秀 道広

### メインテーマは「小児皮膚科学の学びなおし」

平成28年7月2日、3日の両日に亘り、ANAクラウンプラザホテル広島において、広島大学大学院皮膚科学教室および同小児科学教室の共催で、第40回日本小児皮膚科学会・学術大会を開催しました。日本小児皮膚科学会は、皮膚科医と小児科医が一堂に会し、小児における皮膚疾患を巡り様々な知見の発表と議論をする場として歴史を重ねて来ました。記念すべき第40回学術大会を開催するに当たり考えたことは、皮膚科医、小児科医が、各々普段学ぶ機会の少ないことを、お互いに謙虚に学び直す機会とすることでした。皮膚科医は、新生児から老人まで、幅広い年齢に亘り、様々な皮膚を診る機会がありますが、皮膚以外の臓器や、疾患、あるいは小児の発達といった点に関する知識は小児科医には及ばず、一方、小児科医は小児については皮膚を含む幅広い知識と経験を有しますが、皮疹を読む力、あるいは小児以外の年代の皮膚疾患についての知識は乏しく、両者が一堂に会して討論することには大きな意味があります。しかし、その議論の前提として、お互いが立脚する知識を共有することも大切で、今回は両者がそれぞれの専門領域では基本と思われることも含めて学び直すことを目指しました。本学会のメインテーマである「小児皮膚科学の学びなおし」とは、その様な狙いを表したものです。

皮膚科医から見て、小児科医は小児に関する総合医であることはもちろんですが、何と言っても子供の成長・発達についてのエキスパートです。そこで1日目は「皮膚病診

療のための成育医療の学びなおし」をテーマにシンポジウムを組み、妊娠・授乳中の薬剤の使い方や検診、予防接種、自閉症などについて学びました。大会2日目は、小児の皮膚病として大きなウェイトを占めるアトピー性皮膚炎について、「アトピー性皮膚炎の時間軸」をテーマにシンポジウムを組みました。

大会前日の7月1日は、広島市南区本浦町の半べえ庭園で学会運営委員会が、続いて庭園内の六角苑にて会頭招宴会が開かれました。会場は広島駅から車で20分程度の旧市内にありながら、閑静な環境の美しい庭園を背にし、学会大会でお世話になりました皆さんとともに美味しい料理を楽しみ、翌日からの学会に向けて英気を養うことができました。



## 1日目のプログラム

学会初日のシンポジウム、「皮膚病診療のための成育医療の学びなおし」では、近年変遷のめまぐるしい予防接種制度の内容や、従来より実施されてきた麻疹、風疹、水痘、ムンプスの2回の予防接種など、皮膚病診療に役立つ小児科検診と予防接種のポイントについて学びました。「造血器腫瘍と皮膚」のシンポジウムでは、ランゲルハンス細胞組織球症、肥満細胞症、そして普段皮膚科の学会では聴く機会の少ない小児のリンパ腫、白血病について、また、造血細胞移植後の皮膚症状などについて学びました。また、自閉症スペクトラム障害についての講演では、この領域の障害と対応の必要性が思いのほか広いことを認識させられました。

慶應義塾大学の久保亮治先生の「なぜペンギンはしもやけにならないの？～生物の環境適応戦略から考える皮膚の発生と多様性～」というユニークな教育講演では、我々が日々目にするヒトの皮膚が、進化や環境適応の視点から他の生物と比べてどのような特徴を持つのか、また常に外界に曝されている皮膚が恒常性を維持するために、いかなるしくみを持っているかということ、大きな視点でご講演いただきました。

本学会の目玉とも言うべき企画は、特別講演1の「親育ち支援の課題」です。

小児の診療を行う上で、子育てを担う親たちとの関わりは避けられません。また、子どもの課題、問題の背景には、彼らを育む親の方に大きな課題が潜んでいることは多く、子育てを行う親への対応が問題解決の鍵を握ることもあることから、本学会では「親学」で高名な明星大学特別教授の高橋史朗先生にお越しいただき、特別講演「親育ち支援の課題」を賜りました。高橋先生には、「自立の基礎」となるのは「人間力」の中核である「対人関係能力」と「自己制御能力」であり、全国に広がった「学級崩壊」の背景には、この「対人関係能力」と「自己制御能力」の未発達という子どもの発達上

の問題があること、そしてそれは「親としての成長、発達」と関係があることなどを教えていただきました。

この日は、他に「皮膚所見から考える免疫不全症」、「食物アレルギーのパラダイムシフト」、「遺伝性血管性浮腫に対する救急医療」、「子どものアザ治療」、「小児アトピー性皮膚炎の最新のトピックス」について、スポンサードセミナーや教育講演で学びました。

夜の懇親会では、あおぞら神楽団による子供神楽「悪狐伝」が披露されました。広島県は神楽が盛んでたくさんの神楽団がありますが、この日はまだあどけない小学生を中心としたメンバーが、艶やかな衣装をまとって舞踊を披露してくれました。会食では、広島ならではの食材を使った料理と日本酒でおもてなしし、ご参加いただいた先生方に楽しんで頂きました。



懇親会アトラクション 悪狐伝のクライマックス

## 2日目のプログラム

2日目は、「乳幼児に対する抗ヒスタミン薬の適正使用に向けて」、「アレルギー疾患と細菌叢」という二つのモーニングセミナーに続き、「小児の血管腫・血管奇形の病態と治療の最前線」についてのシンポジウムが開かれました。血管腫、脈管奇形、脈管形成異常の新しい考え方、内服治療、レーザー治療の他、聖マリアンナ医科大学放射線医学の三村秀文先生にIVRによる治療についてご講演いただきました。また、特別講演では、京都大学 iPS 細胞研究所の中畑龍俊先生に、疾患特異的 iPS 細胞による病態解析や新薬の開発と、iPS 細胞を用いた今後の医療の可能性について教えていただきました。杏林大学皮膚科教授の大山学先生の教育講演では、成人に比べ検査や治療の制約の多い小児脱毛症診療をいかにやっていくか、大変実践的なレクチャーを頂きました。

二つのランチョンセミナーでは、子どもと大人のアレルギーの診断のポイントと対処法、自己炎症性疾患を疑ったときの診断のポイントについて、こちらも実践的で充実した内容を学びました。

午後のプログラムでは、会頭肝煎りのシンポジウム、「アトピー性皮膚炎の時間軸」が開かれ、「新生児期から始めるアトピー性皮膚炎の発症予防」、「アレルギーマ





一子とアトピー性皮膚炎」、「小児期のアトピー性皮膚炎の時間軸」、「成人のアトピー性皮膚炎の時間軸」について発表されました。ともすれば短期間の治療内容に推移しがちなアトピー性皮膚炎への取り組みについて、長期コントロールや治療の限界、近年増加しつつある高齢者のアトピー性皮膚炎なども含め、大きな視点で考え直す機会となりました。

### おわりに

本学術大会では、幸いにも大きく天候が崩れることもなく、全国から計 521 人の皮膚科医、小児科医、コメディカルの皆さんにご参加頂き、盛況のうちに終了することができました。ご支援頂いた高森会長をはじめとする日本小児皮膚科学会の先生方、事務局の皆さん、事務局の運営をお願いした日本コンベンションサービスの方々、そして学会の運営に携わった広島大学皮膚科学教室の教室員、事務員にも、この場を借りて深謝します。ありがとうございました。

